



巻頭言

女性が科学技術に貢献する時代に

●
蟻川芳子 Yoshiko ARIKAWA

日本女子大学学長



近年文部科学省では科学技術振興調整費により、「女性研究者支援モデル育成事業」を行っている。女性が仕事を継続するには、子育て期間中仕事を中断したり、仕事を辞めるのを余儀なくされるケースが多いためその支援が必要という理由である。特に日進月歩の科学分野では、数年のブランクを取り返すのはなかなか困難である。この事業には国公立の大学が手を挙げ、すでに多大学のプロジェクトが採択されている。筆者の大学で採択されたプロジェクトは、なかなかスマートな企画であったと思うが、最後のシンポジウムでこんな質問が出た。「ここで支援を受けた子育て中の研究者は、それぞれ将来への道が開けましたか」ということだ。その成果が出て初めて成功のレッテルが貼られることになる。これは次の事業である女性研究者比率を上げる取り組み「女性研究者養成システム改革加速」に、委ねることになる。しかしその企画書を作成する段階で疑問も生じた。人事計画に女性研究者採用の人数を示すことである。女性の数が増えることはありがたいが、無理な数合わせによる研究の質の低下を招かないことを希望する。

日本において女性研究者の存在が認識されたのは、1913年に化学の黒田チカ・丹下ウメ、数学の牧田らくの三女性が、初めて東北帝国大学に入学したときであろう。ヨーロッパではすでに1903年にキュリー夫人がノーベル物理学賞を受賞しているのに比べると、日本の女子教育の遅れが目立つ。そもそも日本では、1800年代後半まで「女性に学問は不要」さらに「科学は害に」とまで言われていた歴史を抱えている。

大学における女性研究者の支援は行われているが、企業における女性研究者・技術者の支援はいかがであろうか。「少子化、理工系ばなれ」という現状では、科学技術を担う若者が少なくなっている。文部科学省は数年前から、女子の小・中学生が「理科に興味を持つよう」呼びかけるキャンペーンを奨励し、附属校を持つ筆者の大学でも理系志向が強くなりつつあることを感じている。20世紀の日本を支えた技術者たちが退職し、次の世代は女性も貢献しなければ、新しい産業革命に向けての科学技術創造立国を維持することは難しい。日本経済を支えてきた科学技術に、女性の感性を加えて新たな局面を展開することができれば、新しい社会構造も形成されることと思う。かつて第二次世界大戦が激しくなった頃、科学技術者の需要の急増と男子労働力の不足を補うために、文部科学省は女子の理科系専門学校の設置を要請し、1944年まで既設の女子専門学校で理系学科の新設が続いた。そして今、再び女子に目が向けられたという戦時中に似た現象が現れたかとも思うが、今度は一時的な女性の起用でなく、男女が共に参画する時代を築くために、地に足をつけた形態になることを期待したい。そのために、企業における女性研究者・技術者の支援を心から要望する。

© 2009 The Chemical Society of Japan